

人が近付いて来る気配がした。それは幽かなものでしかなかったが、初めての戦で気が昂ぶっていた晁蓋にとつて、確かに感じられるほどの気配だった。気配は一つで、思いの外早く近付いて来た。

「止まれ。どこから来た」

晁蓋は小声で訊いた。気配に殺気を感じなかったからだだった。

一の木戸の二百歩ほど先にある大木の蔭から、人影が現れた。それは少し戸惑ったように立ち止まっていたが、意を決したように堂々と晁蓋の方に近付いて来た。

男だった。大柄ではなく、一見華奢な印象さえあった。歩き方に特徴があり、つま先だけで歩いているように見える。そのため、ゆっくりに歩いているように見えて、実は意外なほどの早さだった。ぐんぐんと男は晁蓋に近付いて来る。月明かりで男の顔が見えた。四十前後か、もっと上なのかそれとも下なのか、一見しただけではどうも判然としなかった。どこにでもいそうで、どこにもいなさそうな、何か不思議な印象の男だった。男は晁蓋の手前、五歩のところまで立ち止まった。

「李逵殿のお仲間か」

声は高すぎもなく、低すぎもなく、何より心に染み透るような響きを持つていた。男はそう言って、僅かに微笑んだようだった。

「私の名は公孫勝。九天玄女様の言いつけにより、宋雪華殿の手当てにまいった。李逵殿にそう伝えられよ。もしも私の名に覚えがなければ、入雲竜が来たと言ってもらえば分かるだろう」

男は何の気負いもなく、そう晁蓋に告げた。

「公孫勝……。俺は聞いてないな。こんな夜更けに、一人で山中を歩いて来るなんて怪しいな」

晁蓋は一応そう言って、その男を検めた。もちろん晁蓋の直感はこの男が敵ではないと告げている。

「怪しい者ではない。時間が惜しいので、夜とは思ったが、急いで来

た。火傷は始めの手当てが大切だ。手間を取らせるな」

男の言葉に、微妙な圧力が加わっている。晁蓋は、それに反発を感じるより、逆らい難い威厳を感じてしまった。

「分かった。ちようど見張りの交代の時だ。黒旋風も起きているはずだ。今、伝えに行く」

男の雰囲気、始めの頃のように穏やかなものになった。晁蓋は、何なんだと心の中で訝りながらも、李達のいる宿舎に向かった。怪しいと言えば怪しい。だが、もし本当に雪華の手当てに来たのなら、今の自分達にとって、最も必要な人間であることも確かだった。ままよ。晁蓋は自分の直感に賭けた。自分を信じられなくて、どうして他人を信じられるというのだ。宿舎に向かって駆けながら、晁蓋はそんなことを考えていた。

宿舎の扉を開けた。灯りの中で、李達が板斧を磨いていた。

「黒旋風。公孫勝っていう男が会いに来てる。雪華の手当てをしに来たと言ってるんだけど」

李達は驚いたように晁蓋を見た。

「公孫勝……。入雲竜のことか」

「ああ、そうとも言ってたな」

李達は発条が跳ねるように立ち上がった。

「来てくれたのか。夜が明けたら、呼びに行かねばならんと思つていたところだ。ありがたい。わざわざ来てくれるとは」

「通していいんだな」

「あたりまえだ。いつもいるとは限らん男だ。嬢さんも運がいい」

扉が開いて、晁蓋の後ろに男が立った。

「李達殿、久し振りであった。三年近くになるかな」

公孫勝が李達に言った。晁蓋が、呆然とした表情で後ろを見ていた。ついて来ていたのに全く気付かなかったらしい。晁蓋が鈍いわけではない。公孫勝とはそういう男なのだ。李達はそう思った。

「いてくれてよかった。夜が明けたら迎えに遣ろうと思つていたところだ。入雲竜、あなたの手を借りたい」

李逵は深々と頭を下げた。晁蓋はわけが分からず、戸惑った顔をして立ちつくしていた。

「李逵殿、頭を上げられよ。私は九天玄女様の指示でやって来た。砦に李逵殿が来ているとな。そして、李逵殿が護っている娘を助けよとな。娘は大火傷を負っているのです、私にその傷を手当てするようにとな」

「九天玄女はお見通しというわけか」

「あの方は多くの部下を抱えている。その者達から情報を得ているのだ。それにしても、随分と派手な立ち回りを演じたものだ」

「したくてしたわけではないのだがな」

「さすが天殺の星。九天玄女様はそう感心しておられた」

「まだ、そんなことを言っておるのか。天殺の星などと言われて喜ぶ者などおらんに」

李逵はうんざりしたような表情を見せた。九天玄女の迷惑な癖だった。これと思つた者に、天の星やら地の星やらの名をつけるのだった。それは、九天玄女にとっては確かな必然性があるとのことだったが、李逵にしてみれば、単なる戯言(ざれごと)にしか感じられなかった。李逵につけられた名は、天殺の星だった。まるで殺人狂のような名で、どうしても受け入れられなかった。九天玄女はそんな李逵の気持ちを斟酌(しんしゃく)せず、天殺の星こそ、腐り果てた古い世を壊し、清新な新しい世を創りだす定め(めいぶん)の星なのだと言っていた。そんな御大層(ごたいそう)な名分(めいぶん)は遠慮(えんりょ)したいが、新しい世を創りだす、その言葉には心が動いたのを覚えている。雪華と共に三年過ぎ、それを為(な)し得るのは雪華ではないのか。李逵にはそう思えてならなかった。

「まず、傷の状態を見させてほしい」

公孫勝が言った。

「こちらへ」

李逵は雪華のもとへ案内した。

・
・
・

曹瑛がついていた。雪華はまだ目覚めてはいなかったが、少し手足を動かしていたようだった。李達達の気配を感じてか、曹瑛が扉を開いた。公孫勝を見て少し驚いたようだったが、李達が頷くのを見て、何も言わずに二人を中に入れた。晁蓋は扉の外に佇んでいた。

「公孫勝という。太医局を出た正式の医師ではないが、医を少々嗜んでいる。私に手当てさせてはもらえないだろうか」

公孫勝の声は、曹瑛の心に響いた。この人になら任せられる。曹瑛は、張り詰めた緊張が一気に解けるような安心感を覚えた。ようやく雪華に、ちゃんとした手当てが出来る。それが嬉しかった。

「儂は表に出ている。詳しいことはこの曹瑛が知っておる。曹瑛、この公孫勝殿は腕のいい医師だ。儂が保証する。これまでのことを公孫勝殿に説明してくれ」

「はい」

「儂はこれから黄玉を呼んでくる。教えとかなないと、後で折檻を喰らいそうだからな」

「そうですよね」

曹瑛が、答えながら笑っていた。

公孫勝が、身体を屈めて雪華の顔を覗き込んだ。次いで、雪華の手をとり脈を計った。胸に手を当てて、心の臓の鼓動と比べていた。次に衫を解いて、傷の状態を調べた。腹部に手を当てて、腸の状態を確かめ、下腹部に手を当てた。

「小水は出ていたかな」

公孫勝が曹瑛に訊いた。

「わたしの記憶ではありません」

「そうか、それにしてもは下腹部に尿の溜まりが感じられん。皮膚にも水気が感じられん。かなり水が不足している。傷はよく手当てされている。痕は残るが、この傷自体が命に障るといふことはないだろう。これまでの経過を話してほしい」

公孫勝は、曹瑛に顔を向けた。曹瑛はこれまでのことを手短に、しかし必要なところは詳細に説明した。公孫勝は頷きながら聞いていた。「おそらく、眠り薬のせいもあるのだろう。だが、身体に水が足りないことは事実だ。起こさねばなるまい」

いきなり扉が開いて、興奮した黄玉が飛び込んで来た。

「医師が来たと聞いた。あなたか」

黄玉は、珍しく気が昂ぶっているようだった。

「そうだが」

公孫勝が平然と答えた。曹瑛は少し感心した。黄玉を初めて見た男は、おおよそ二つの反応しかなかった。心ここに在らずというふうに見とれているか、逆に無理に見ないようにして不自然な態度をとるか、程度の差こそあれ、そんなような反応しかなかった。李達だけは別であったが、三歳前から見ているので、参考にはならなかった。晁蓋は典型的な後者だった。雪華につきまとい、その度に李達や黄玉につまみ出されていた。そうしたこともあるが、やはり晁蓋は黄玉に対して不自然だった。雪華を好きなのは間違いないが、黄玉には苦手にしているという以上の複雑な感情を抱いている。曹瑛はそんなふうに思っていた。

黄玉が雪華の身体に目を遣った。その名のとおり、雪のように白く滑らかな雪華の肌に、目を背けたくなるほど痛々しい傷が幾つもあった。黄玉の瞳に炎が点った。

「戻せ。雪華姉様を元に戻せ。出来ぬなら、おまえを殺す」

黄玉はそう叫ぶと、いきなり公孫勝の胸倉を締め上げた。

「黄玉、やめなさい」

曹瑛が叱咤したが、黄玉には届かなかった。

黄玉の両手に、力が込められていくのが分かった。黄玉は、女にしては大柄で力も強い。実際、身長は公孫勝とそれほど差がなかった。肩幅では、黄玉の方が勝っているほどだった。その黄玉が、我を忘れて公孫勝の首を締め上げていた。李達を呼ばないと。曹瑛はそれしか思い付かなかった。

公孫勝の目に、幽かな憐れみの色が浮かんだように見えた。本当は息も出来ないほど苦しいはずだ。黄玉は全く手加減していない。見間違いかしら。曹瑛は自分の目を疑った。公孫勝の左手が、ふわりと黄玉の右手首を掴んだ。それは、自然にしか見えないほど滑らかな動作だった。公孫勝の右手が、黄玉の右肘に掛かった。黄玉の肘は、公孫勝の首を絞め上げているので曲がっている。そこに、まるで鉤を引っ掛けるように公孫勝の右手が添えられたのだった。公孫勝の身体が沈んだ。同時に黄玉の右肘が内側に回転した。信じられないほど鮮やかに、黄玉の身体が宙に舞った。床に落ちる前に、公孫勝が黄玉の頭を左手で支えた。黄玉に怪我をさせないようにしたのだろう。あまり音をたてずに、黄玉の身体が床に落ちた。曹瑛は、目の前の光景が信じられなかった。女とはいえ、黄玉だった。李逵との稽古でも、こんなに鮮やかに飛ばされることなどなかった。凄い。曹瑛は心が震えるのを感じた。

公孫勝が黄玉を助け起こした。黄玉ははじめ、何が起きたのか分からないといった顔をしていたが、公孫勝をみとめると腰の剣に手をかけた。

「黄玉」

曹瑛はそう叫んで、黄玉の頬を張った。黄玉は、剣にかけた手を離し、そのまま床に膝をついた。

「済みませんでした……」

黄玉の頬を、幾筋もの涙が零れ落ちた。

「耐えられなかったのです。雪華姉様が、こんな酷い目に遭ってしまったことが。あなた様に助けていただくしかないというのに。こんなに取り乱してしまいました。馬鹿なわたしを、どうか殺してください」
そう言ったまま、黄玉は涙を流し続けた。

「黄玉、あなたが死んでどうするというのは。それで雪華姉さんが喜ぶとでも思うの」

曹瑛の目からも、留めなく涙が溢れてきた。そう、わたしもこうして泣きたかったんだわ。曹瑛は、初めてそのことに気付いた。怒涛の

ように押し寄せてきた苦難の連続に気を取られ、曹瑛は、そんな人としての素直な気持ちを忘れていたのだった。身体を傷付けられた雪華と、心を傷付けられた自分自身への悔しさを。そう、わたしは汚れてしまったんだわ。あの李吉という男のせい。それを思い出すと、曹瑛は涙が止まらなかつた。二人は肩を抱き合って泣き崩れた。その隣で、公孫勝が困惑した面持ちで佇んでいた。

「曹……瑛……」

牀の方から声がした。弱弱しいものではあったが、それは間違いなく雪華のものだった。

「姉様、目を覚まされたのですね」

黄玉が、飛び跳ねるように雪華のもとに走った。

「ああ、黄玉。いたのですか……」

少しずつ、雪華の意識が戻っているようだった。

「姉様。もう大丈夫です。李達様、それに聞起もおります」

「李達……。そうね、無用を黒旋風に戻してしまいました。わたしのせい。わたしが不注意なばかりに……」

雪華は両手で顔を覆った。指の隙間から、一筋の涙が零れ落ちた。

「姉さんのせいじゃない。悪いのは魯權よ。そしてそれに乗った黄文柄。あいつ等が姉さんを、こんな酷い目に遭わせたの」

曹瑛の言葉に、雪華は答えなかつた。少しの間、気まずい沈黙が流れた。それを破ったのは雪華だった。

「黄玉、曹瑛。怪我はありませんか」

「わたしは何も」

黄玉が言った。

「わたしも大丈夫です」

曹瑛は誤魔化した。このことは、雪華に知られてはならない。これ以上、雪華の心に負担をかけてはならない。曹瑛はそう心に誓った。

「ここに、医師が来てくれます。今さつき、わたしが大変な失礼をしてしまったのですが」

黄玉は心から恥じているようだった。

「気にしてはいない。気が動転していたのだらう。無理もない。こんな状況ではな。謝る必要はない。私も少々手荒なまねをしてみました」
公孫勝は、そう言つて雪華に微笑んだ。

「いえ、あなた様には全く非はありません。八つ当たりしたわたしが悪いのです」

黄玉は床に伏して、頭を垂れて謝った。

「一途な娘さんだ。それでは罰として、いつか私の肩でも揉んでもらうとするか。最近、どうも腕の上がりが悪いのでな」

曹瑛が声をたてて笑った。黄玉が肩を揉む姿など、考えただけで笑えてしまう。雪華も笑いを堪えているようだった。

「はい、必ず」

黄玉だけが、真面目な顔で公孫勝に答えていた。

「わたしは……。そう、魯權の家宰に……」

雪華の顔が、一瞬恐怖の色を浮かべた。

「大丈夫だ。傷は治せる。幸い肉にまで達する傷はない。深いものでも脂までだ。ただ、痕は残る」

公孫勝の言葉は、事実のみを告げていた。

雪華は少し顔を曇らせたが、思い直したように公孫勝に訊いた。

「痕が残るのは構いません。ですが、動くのに差し障りがあるでしょうか」

「ある。特に脇の傷が」

あくまで冷静な答えだった。

「そうですか」

雪華は、何かを考えるように黙ってしまった。堪らず、黄玉が哀願するように公孫勝に訊いた。

「何とかありませんか。あなた様しか頼れる人がおりません。お願いします。この通りです」

黄玉は額を床に打ちつけた。大きな音がして、黄玉の額から血が滲み出た。

「本当に一途な娘さんだ」

公孫勝は、呆れた表情で黄玉を見ていた。そして、おもむろに口を開いた。

「試している方法がある」

そう言った公孫勝の顔は、自信に満ちたものではなかった。

「それは」

黄玉が訊いた。

「他人の皮を移すのだ」

「他人の皮……」

黄玉は、怪訝そうな顔をした。

「そうだ、他人の皮を欠けた部分に植えるのだ。私はこれを移植と呼んでいる」

公孫勝の言葉に、力がこもってきた。

「そんなことが……」

「何人か試したことがある」

「それで」

「うまくいったものも、駄目だったものもある」

「何故」

黄玉と公孫勝の、二人の会話になっていた。曹瑛そして雪華は、ただ黙って聞いているだけだった。

「合う場合が少ないのだ。受ける側と与える側に相性があるのだ。合わない時は、移植した皮は腐って落ちる」

「合う合わないか、予測することは出来ないのですか」

「難しい。小さな皮で試すことは出来るが、結果が分かるまでには時がかかる。その間に、受け手の傷の状態が悪くなり、移植が出来なくなってしまう。移植には、血の管も重要なのだ。時間が経ちすぎると、血の管が繋がらなくなるのだ」

公孫勝はそう言って、小さな溜息をついた。

「合った場合は」

「傷が完全に塞がることはない。だが、移植しないよりは遥かによくなる。特に動くことについては」

「その移植とやらを、してただけませぬか」

「無理だ。宋雪華殿の肉親でもない限り」

「今この世に、雪華姉様の肉親はおりません。他人ではいけませんか」
公孫勝は頭を振った。

「血の繋がった者同士でさえ合わない者がいる」

「他人で試したことは」

「ある。うまくいったのは一人だけだった」

「それでは、雪華姉様にも」

「駄目だ。そんな分の悪い賭けは出来ぬ。まず、血が合わねばならぬ」

「血が合うとは」

「お互いの血を混ぜ合わせるのだ。血が合う者は固まるのが遅い。合わぬ者同士の血はすぐ固まる」

「では、血が合えば移植とやらが出来るのですね」

「そう簡単ではない。血が合っても、皮が着くとは限らぬのだ。やってみなければ分からぬ。その程度のものでしかない」

黄玉が下を向いた。また、涙が溢れたようだった。

曹瑛は、黄玉の気持ち痛みほどよく分かった。雪華姉さんの身体を少しでも元に戻したい。そのために、自分の皮を与えたいと思っ
ているのだ。だが公孫勝の話では、それはほとんど望みのないものとし
か思えなかった。

「無理なのでしょいか」

黄玉は諦めきれない様子だった。

「無理なものは無理なのだ。それより、これから傷の手当てをする。
おまえ達も手伝ってくれるとありがたい。幸いこれまでの手当ては、
応急にしてはなかなかのものだ。毒が回ることはないだろう」

「曹瑛が、手当てしたのです。わたしなどより、遙かにしっかりして
おりますから」

「そうか。曹瑛とやら、立派なものだ」

公孫勝は、そう言って曹瑛に微笑みかけた。それを見て、曹瑛は何
故か頬が火照るのを感じた。

公孫勝の手当ては、見ていて気持ちがいいほど鮮やかなものだった。傷を、持って来た薬で洗い、素早く、しかも丁寧な傷の周りの腐りかけた皮を削いでいった。

「これが大事なのだ。この傷の周りの皮は、熱で壊され、もう元には戻らぬ。これをそのままにしておくと、新しい皮が出来るのを邪魔するのだ。だから、これを出来るだけ早く削ぎ落とすのだ。それも、一見何ともないようなところまでだ。宋雪華殿、少し痛むと思うが堪えてもらいたい」

雪華は、時折痛そうな表情を見せたが、声は漏らさなかった。火傷の範囲を考えると、それは驚くべき忍耐強さだった。大した娘だ。公孫勝は、そう心の中で感嘆した。

傷の手当てが終わり、新しい布を巻き終った後、雪華が口を開いた。「曹瑛、黄玉。世話をかけて済みません。それに皆にも。医師様には、こんなに丁寧な手当てしていただき感謝の言葉もありません。わたし一人の不始末で、こんなに沢山の人に迷惑をかけてしまいました。曹瑛、わたしは目は開いていなくても、耳は聞こえていたのです。もちろん、途切れ途切れではありませんが。だから、おおよそのことは分かります。わたしのせいで、皆追われる身になってしまったことも。幾度も戦いがあったようですね。そして犠牲も沢山。わたしなんかのために死なれたその方達に対して、わたしは何とお詫びしたらいいのでしょうか。こんな取るに足らないわたしなんかのために……」

雪華の慟哭が、広い部屋に響き渡った。堪えていた気持ちが一気に溢れ出したように、雪華の頬を、次々と涙が流れ落ちていった。

「雪華姉さん」

曹瑛の手が、雪華の手を包んだ。黄玉は雪華を見詰めて、涙を流し続けていた。公孫勝は胸の前で腕を組み、哀しみとも怒りともつかない表情で部屋の壁に目を遣っていた。

雪華は曹瑛の手の温もりを感じながら、これは三歳前のあの時と同じ温もりだと思った。初めて人を殺した時に、雪華の心を救ってくれたあの温もり。今度もこうして、曹瑛と黄玉に助けられるのだ。雪華

は心の中でそう思い、それが何よりも雪華の心に、甘美な安らぎを与えてくれるのだった。

・
・
・

夜明けが近い。そう聞起は思った。距離の割に時がかかった。亀伏山から降りる道が、意外に複雑だったのだ。だが、聞起にとっても厄介な道なら、攻める兵にとっても登り難い道だということだ。どちらかというところ、攻め難い方がよかった。味方の数が圧倒的に少ない。砦への道は、むしろない方がいいと聞起は思った。

もう、東汾山^{とうぶんざん}に入って四刻にはなるだろう。一向に砦らしきものは見えなかった。陳達^{ちんたつ}どころか、人らしき姿は見当たらなかった。山を間違えたか。聞起は地形を憶えるのが得意だった。それだけではなく、初めての場所でも、陽^ひの位置からおおよその方角を知ることが出来た。馬で遠出することが多い聞起にとって、そんなことはあたりまえのことだった。間違えてはいない。聞起はそう確信した。方角、距離。李達から聞いた東汾山は、ここ以外に在り得なかった。

「誰もいないのかな」

その時間起の後ろで、微かに木の枝が揺れた気配がした。

「誰かいるのですか。私は陳達殿に用があつて来ました。いるなら出て来てください」

聞起の声に誘われるように、下生^{したば}えの奥から男が一人現れた。

「頭領に何の用だ」

男は警戒しているようだった。

「陳達殿に至急伝えたいことがあります」

男は少し考えるようなしぐさをしたが、警戒を解いてはいないようだった。

「頭領を知っているようだが、何者だおまえ」

「聞起といいます。黒旋風李達殿の言伝^{ことづて}を持ってまいりました」

男は驚いた顔をした。

「黒旋風といやあ……。ちょっとそのまま待っている。今、頭領に報告してくる」

男は聞起を残して、風のように木々の向こうに走り去っていった。暫くして、数人の人の気配がした。馬に乗っているらしく、枯れ枝を踏む大きな音も聞こえてきた。さして長い時間でもないのに、聞起は随分と待たされたように思った。緊張しているのだらうと、聞起は自分に言い聞かせた。

六人だった。そのうちの一人が聞起に言った。

「おまえが、俺に用があるという小僧か」

では、この男が陳達なのだろう。

「聞起といいます。黒旋風殿の言伝を報せに来ました」

「黒旋風の兄貴の……。おまえは兄貴の何なんだ」

いきなり振られて、聞起は答えに窮した。

「弟子……。かな」

陳達の顔が陰しくなった。細身だが上背のありそうな体格だった。顔の下半分が硬そうな髭で覆われ、怒ると李逵に似た印象だった。少なくとも蘇源よりは李逵に似ていた。

「兄貴は弟子をとらねえ。何者だ、おまえ。官軍の手先ではなさそうだが、馬が立派すぎる。怪しい小僧だ」

陳達はそう怒鳴って、持っていた鎗を一振りした。一丈※にも満たない短めの鎗だったが、重さはかなりあるようだった。柄が鉄らしく、空気を重く震わせていた。※一丈 約二・二メートル。

「小僧、さつさと山を下りるか、それともこの鉄管鎗※の錆になるか」
山を下りるわけにはいかなかった。

※鉄管鎗 柄が中空の管になっている鉄鎗。硬い割に軽い。

「待ってください。あなたの右肩には青痣あざがあると、李逵殿から聞いています。それに蘇源殿のことも」

陳達は一瞬鎗を止めたが、すぐに腰に構え直した。

「戯言ざげんを言うな」

風を切り裂くように、陳達の鎗が伸びて来た。速い。聞起は用心し

た。

「本当に李達殿の遣いです。すぐに亀伏山に来るようにと」

陳達は構わず鎗を繰り出してきた。だが、どこか狙いを逸らしているようだった。

聞起は、後ろに退いた。隴月が巧みな脚捌きで、聞起が鎗をかかわすのを助けていた。鋭い突きだった。だが、聞起に危害を加えようとの意志は感じられなかった。そうはいつても、いつまでもかわし続けられるような鎗ではなかった。

聞起は退きながら後ろを確かめた。十馬身ほどで、岩壁につきあたりそうだった。聞起は肩に巻いた流星錘を握った。

「隴月、壁だ」

聞起が隴月に叫んだ。

隴月が馬首を返して、岩壁に向かって駆け出した。直前で、隴月が大きく跳んだ。そのまま岩壁を斜めに駆け上がり、二丈ほどの高さのところまで陳達に向かって飛び跳ねた。聞起が流星錘を投げた。錘は陳達の真上、二丈五尺ほどのところに張り出した、大木の枝に絡みついた。陳達が初めて、神速の鎗を突き出してきた。だが、鎗の先に聞起の姿はなかった。陳達が頭上を見上げた。流星錘の紐にぶら下がって、聞起の身体が陳達の頭上を越えていった。陳達を越えた直後、聞起がもう片方の錘を放った。払う間もなく、錘は陳達の鎗に絡んだ。聞起が振り子の勢いを利用して、陳達の鎗を奪った。鎗を遠くに抛った聞起を、駆けて来た隴月が受けとめた。鮮やかな連携技だった。

陳達、残りの男達が口を開いたまま呆然としていた。気を取り直したように陳達が言葉を発した。

「見事だ、聞起とやら。それにおまえの馬も」

陳達は、心底感心したようだった。聞起は陳達の鎗を拾って、隴月と共に陳達の馬前に向かった。

「聞起だったな。試して済まなかった。俺の青痣のこと、蘇源の名を出したことで、おまえを信じてはいたのだがな。黒旋風の兄貴の弟子だとおまえが言ったのでな、ちよっと試させてもらったのだ。いや、

若いのに大したものだ。兄貴の弟子というのは本当らしい。珍しいこともあるものだ、あの兄貴が弟子をとるとは。だが、おまえの腕を見て納得したぞ。いい跡継ぎを見付けたものだ」

陳達は、そう言って聞起に微笑みかけた。優しそうな笑顔だった。こうして見ると、李達とは印象が違うな。聞起はそんなことを思ってしまった。

「用とは」

陳達が訊いた。

「亀伏山に来てほしいということですよ。お仲間を全員連れて」

「亀伏山に……。蘇源の砦にか」

「はい」

「では、蘇源は」

聞起は答えず、じっと陳達の目を見た。

「そうか、蘇源がな……」

陳達は暫くの間、黙って岩壁を見ていた。

「惜しい漢を失くしたものだ。俺と蘇源、それにもう一人、没面目※という綽名の焦挺。この三人が兄貴の腹心だった。兄貴が山を下りてから、皆ばらばらになってしまったが、俺と蘇源は連絡を取り合っていた。亀伏山で元気にやっていると思っていたのに」

陳達の頬をひとすじの涙が流れ落ちた。

※没面目 鍋底顔。顔の中心部分がへこんでいる。

聞起は、陳達に声をかけそびれた。

「分かった。黒旋風の兄貴が俺達を頼ったのだ。相当辛い状況なのだろう。よほどのことがない限り、兄貴がそんな頼みごとをするわけがない。すぐに全員を集める。少し待っていてくれ。事情は道々聞くとしよう」

陳達はそう言って、五人の男達に命令を出した。男達は素早く木々の向こうに消えて行った。

「この山はどうするのですか」

聞起が訊いた。

「残すほどのものではない。俺は蘇源ほど器用ではないのだ。砦と言えるほどのものも造らなかつた。火をかけるという手もあるが、蘇源の砦のように、いずれ何かの役に立つかもしれない。木や草で隠しておく」

「そうですね」

聞起は、陳達が好きになつていくことに気付いた。李達は父のようだが、陳達は頼れる兄のようだった。

「それはそうと、兄貴の弟子はおまえ一人なのか」

聞起は何と答えていいか分からず、思わずでまかせを言つてしまつた。

「あと二人」

「ほお、全部で三人か。それは大したものだ。で、やはりおまえが一番弟子か」

聞起はますます深みに嵌つてしまつた。

「いえ、劍の天才、飛鏢の達人が。二人とも私より強い」

陳達が驚いた顔をした。

「おまえ以上に強いのか。そうか……。それなら、黒旋風の兄貴は俺達に武ではなく数を期待しているということか。それならそれでいい。蘇源は雄雄しく戦つたことだろう。俺達も、それに恥じないような戦いをするだけだ」

陳達は腕を組んで遠くを見遣つた。その顔には、何か清々しいほどの気持ち良さが浮かんでいた。

聞起は陳達に頼もしさを感じると共に、弟子のことで騙してしまつた後ろめたさで、どうしても心の蟠りを捨てきれないでいた。